

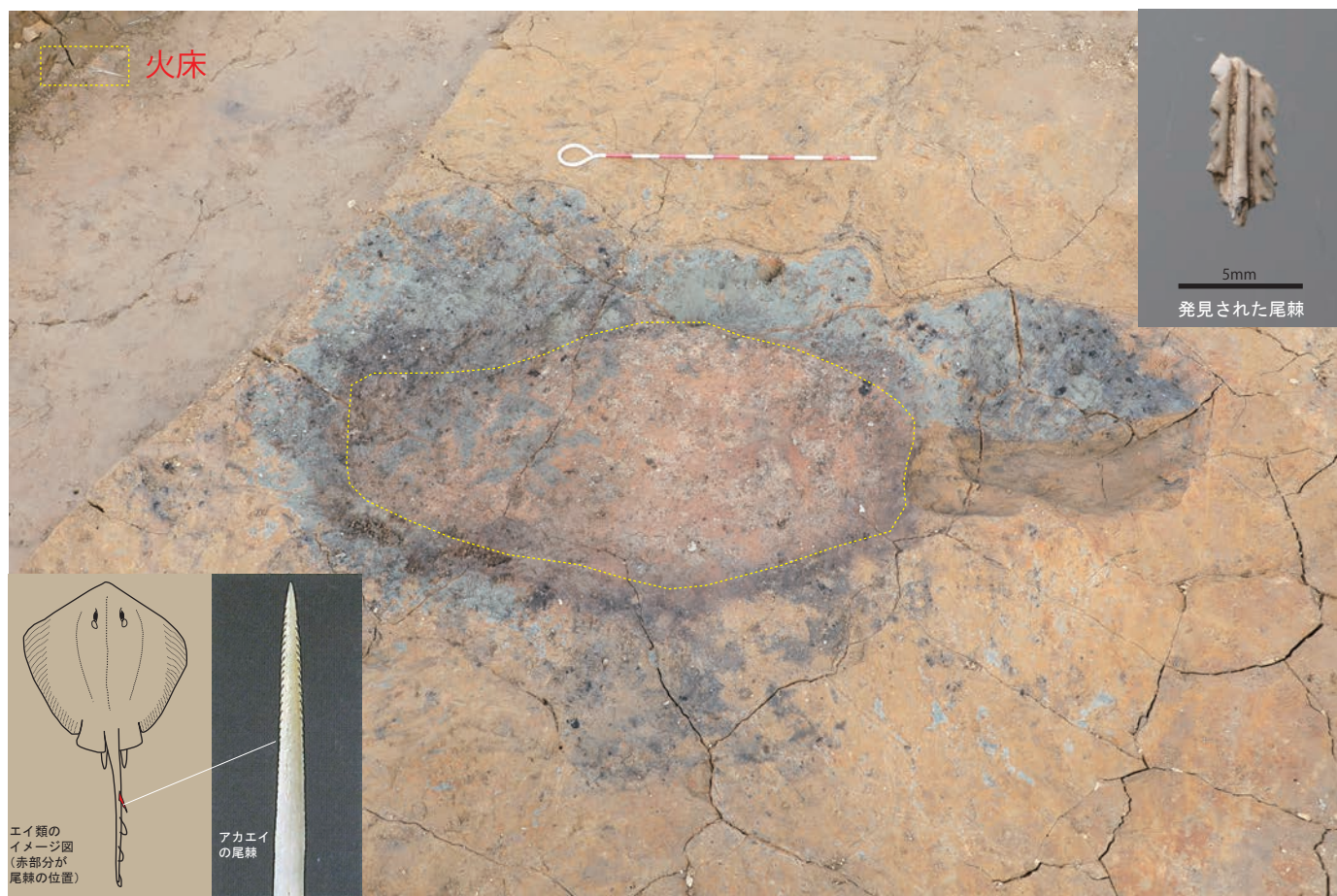
埋蔵文化財調査センター
ニュースレター

特集 海水魚骨

石狩湾の海岸から直線距離で約15km南に位置する構内の遺跡では、海水魚の骨が発見されています。焼けた状態で遺構に残されていたことによって、他の動物骨とともに、確認できたと考えられます（遺跡で動物骨が残される理由については、ニュースレター第12号「遺跡出土の動物骨」特集をご覧ください）。

構内遺跡では、出土動物骨の同定が数多くおこなわれています。特に魚類では、擦文文化でサケの利用が活発となることとともに、続縄文文化、擦文文化でなぜか海水魚の焼骨が少量みられると指摘されています（江田真毅ほか「考古学からみた北大キャンパスの5,000年」88頁 2019年刊行）。確認された海水魚の種類、遺構での残り方を検討すると、利用後の残渣として魚骨が火床に捨てられた様子、骨角器としての利用が推測できます。

本特集では、構内遺跡で発見された海水魚骨および、その発見遺構を集成して、紹介します。

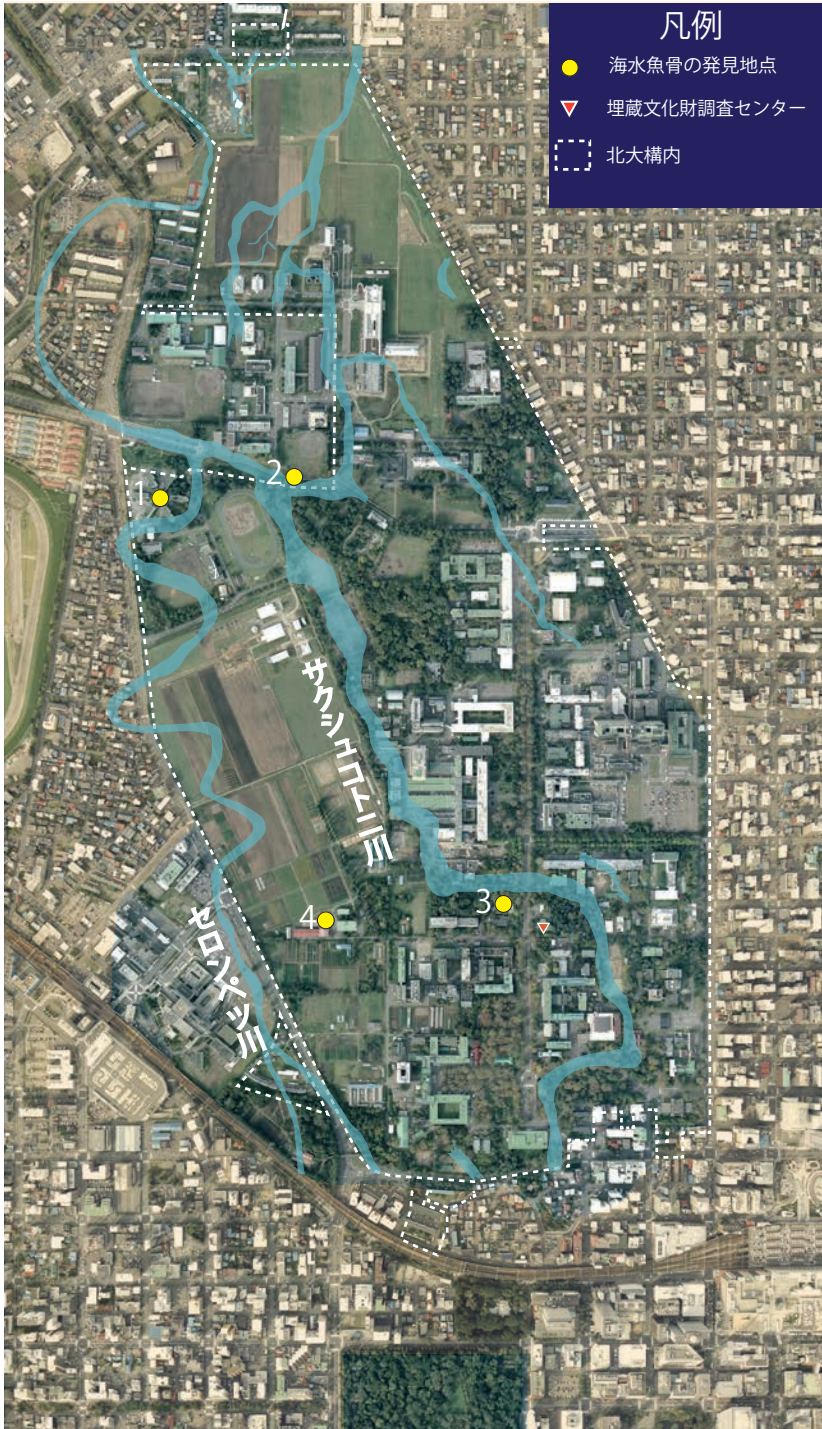


▲ 海水魚骨が発見された屋外炉址（続縄文末期：約6世紀の粘土層で発見）

K39遺跡北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点の調査では、標高約10.5mの基本層序16層の地層面で、屋外炉址4基が確認された。そのうちの1基（上の写真：第105号炉址と呼称）では、炉址に堆積していた土壌を採取し、水洗選別する調査の結果、エイ類の尾棘（ビキョク）1点が、サケ科魚類の椎骨とともに発見された。尾棘には毒があることが知られている。

アカエイの尾棘写真：「ニューワイド 学研図鑑 魚」 株式会社学研研究社 2008年刊行から引用

海水魚骨が発見された地点



凡例

- 海水魚骨の発見地点
- ▼ 埋蔵文化財調査センター
- ⋯ 北大構内



海水魚骨が発見された炭化物マウンド（下表の1-d）の遠景（擦文文化：約9世紀）



海水魚骨が発見された竪穴住居址カマド（下表の1-b）の平面形写真（擦文文化：約9世紀）

▲ 恵迪寮地点で焼けた海水魚骨が発見された遺構



海水魚骨が確認された動・植物遺存体収集地点（下表の3）の発見された地層面（続縄文文化前半：約1世紀）

▲ ゲストハウス地点で焼けた海水魚骨が発見された遺構

番号	地点名	時期	出土遺構	遺構数（基）	種・部位	報告書名	備考
1	K39遺跡 恵迪寮地点	擦文中期	焼土・炭化物集積所 (DB)	1	ニシン科魚類（マイワシ） 椎骨	サカサゴ川遺跡（1）1986 北海道大学	
		擦文中期	竪穴住居址（HP）カマド	1	ニシン科魚類（マイワシ） 椎骨	サカサゴ川遺跡（1）1986 北海道大学	
		擦文中期	土塚（PIT）	3	ニシン科魚類（マイワシ） 椎骨	サカサゴ川遺跡（1）1986 北海道大学	
		擦文中期	炭化物マウンド（DC）	1	ニシン科魚類（マイワシ） 椎骨、フササゴ科魚類椎骨	サカサゴ川遺跡（1）1986 北海道大学	
2	K39遺跡 エルムトンネル地点	擦文前期	炉址（HE）	2	ニシン椎骨、ニシン尾椎	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
		擦文前期	焼土粒集中箇所（DB）	1	ニシン耳骨	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
		擦文中期	竪穴住居址（HP）カマド	2	ニシン椎骨ほか	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
		擦文中期	竪穴住居址（HP）内の炉址	1	ニシン耳骨	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
		擦文中期	竪穴住居址（HP）内の焼土粒集中箇所	1	ニシン尾椎	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
		擦文中期	炉址（HE）	4	ニシン腹椎、椎骨	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
		擦文中期	焼土粒集中箇所（DB）	2	ニシン椎骨	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
		擦文中期	炭化物集中箇所（DC）	1	ニシン椎骨	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
		擦文後期	炉址（HE）	1	エイ目の尾棘、ニシン椎骨	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
		擦文後期	炉址（HE）	2	ニシン椎骨	K39遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
3	K39遺跡 ゲストハウス地点	続縄文前半	V-1層 動・植物遺存体収集地点-1	1	ニシン科魚類(?) 椎骨	北大構内の遺跡10 1995 北海道大学	その他の遺構と位置づけ
4	K39遺跡 北方生物圏フィールド科学センター 実験実習棟地点	続縄文末期	炉址（HE）	1	板鰓垂網（エイ類）尾棘	北大構内の遺跡29 2023 北海道大学埋蔵文化財調査センター	

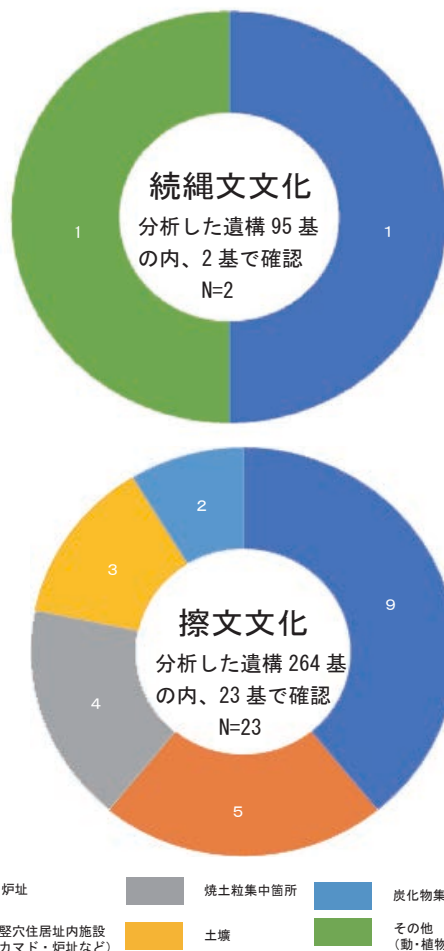
※HP（竪穴住居址）、HE（炉址）、DB（焼土粒集中箇所）、DC（炭化物集中箇所）、PIT（土塚）と略記する。

■ 海水魚骨が発見された遺構

構内遺跡で確認された遺構では、動物骨が残されていることが多く、破片となった動物骨の同定が実施されています。動物骨の同定が実施された遺構の総数359基の内、縄文文化で2基、擦文文化で23基の遺構で海水魚類の骨（エイ類、ニシン科魚類もしくはニシン）が確認されています（右図）。

縄文文化では炉址からエイ類の尾棘1点が発見されている一方、擦文文化では炉址、竪穴住居址のカマド・炉址で、ニシン科魚類（もしくはニシン）、エイ類の尾棘1点がみられます（2頁表を参照）。

炉址、竪穴住居址のカマドでは、火床の直上に堆積した土壌で海水魚類の焼骨の集積が著しいことから、調理などに利用した後、海水魚類の骨を含む残渣が火処に廃棄されていた可能性があります。



海水魚骨が確認された遺構の種類と数量

動物骨の同定が実施された遺構を集計し、それらの中で海水魚骨が発見された遺構の数、種類を円グラフで示した。

■ 尾棘製の骨角器

縄文文化の本州の遺跡では、エイ類の尾棘製の骨角器が発見されています。

群馬県不動穴洞穴（下写真の左）では、縄文文化草創期から中期の土器片が確認された地層で、尾棘製のヤス状刺突具（下写真の右）が見つかっています。ヤス状骨角器の基部では両側からえぐられた加工痕があり、柄に取り付けられる際の痕跡と考えられます。



▲ 群馬県不動穴洞穴の様子（左写真）、骨角器（右写真）

骨角器はヤス状刺突具（長さ7cm、最大幅6mm、厚さ2.5mmの大きさ）である。不動穴洞穴団体研究会，2022，不動穴洞穴発掘調査報告書から引用。

■ ニシンの特性

ニシン科魚類のニシンは、北海道の日本海側（石狩湾など）などでみられる海水魚です。体長は、約12年で約36cmになります。

普段は、海水の上層部から水深約100mの範囲までを群れで回遊している一方、産卵期である冬季から春季にかけては、海の沿岸で海藻に雌が産卵します。ニシン卵の受精の際の様子は、「群来」と呼ばれています。

遅くとも18世紀にはカズノコ、干物などの加工・利用があったことが知られています。



▲ ニシンが群れで回遊する様子

ニシンは、魚体の側面および腹面が銀色で、背鰭の周辺が黒色である。佐藤長明ほか，2022，北の磯魚生態図鑑。北海道大学出版会から引用

■ 海外のニシン料理

日本でのニシン科魚類（ニシンなど）の利用があるように、欧米、北欧の国々でも様々なニシン料理がみられます。

ドイツのベルリンでは、ニシンの酢漬けを使い、飽きがないように工夫した料理があります。レタス、玉ねぎのスライスを添えるとともに、調理したニシンの半身を長いロールパンに挟みこんだサンドイッチ（右写真）は、ビールとともに食べるのが人々の楽しみとなっています。

ニシンは、扱いやすく、親しみのある食材のようです。

ドイツのベルリンで食べられているサンドイッチ料理 ▶

キャシー・ハント、龍和子訳、2018、ニシンの歴史、「食」の図書館、株式会社原書房から引用。



■ 当センターの活動紹介ホームページ

北海道マガジン「カイ」ホームページにおいて、当センターが特集されています（アドレス https://kai-hokkaido.com/feature_vol51/）

是非、ご覧ください。

札幌の巨大遺跡・北海道大学を掘る —北海道大学埋蔵文化財調査センター



北海道大学構内を流れるサクシュコトニ川周辺では遺跡が多く見つかった。北大構内のほとんどはK39遺跡で、一部はK435、北大新館前はC44と呼ばれる。ここは縄文文化のキャンパ地跡が発見された「ゲストハウス地蔵」周辺

知る人ぞ知る大学のミュージアム巡りの最後に訪れたのは、「北海道大学埋蔵文化財調査センター」。実は、北海道大学のキャンパス自体がほぼ遺跡なのだ。こうした例は、道内はもちろん全国的に見てもあまりない。大学構内を専門に発掘調査・研究する大変珍しい施設にも、出土物の展示室がある。

栗田美幸・text 原澤ミチオ・photo

▲当センターが紹介された web サイト画面

提供：株式会社ノーザンクロス

編集後記

構内の遺跡に海水魚骨が発見された遺構がいくつかあるとわかり、今後の遺跡調査で注目していく点が得られました。

細かい破片となった動物骨の同定分析では、遺構の調査時に慎重さがより必要であること、積み重ねることで明らかになる現象が隠されていると感じました。（守屋）

■ 第13回遺跡調査成果報告会の開催

2024（令和6）年3月9日（土）の午後に、本センターが主催する調査成果報告会を実施しました。第13回目となる本イベントでは、69名の参加者に対し、構内遺跡の調査成果、土器、ガラス製品、黒曜石製石器にみられるモノの移動がシンポジウム題材として発表されました。



▲会場の様子

北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター第47号

発行：北海道大学埋蔵文化財調査センター
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話：011-706-2671 FAX：011-706-2094

e-mail：hokudaimaibun@gmail.com

URL：http://maibun.facility.hokudai.ac.jp/